

1 令和6年度第3回学校運営協議会で委員の皆様から出された意見

【次年度のテーマとして考えられること】

- 家庭学習(学力の定着)
- メディアとの適切な付き合い方
- 読書活動の推進も大切
- 児童生徒が何事にも「客体」ではなく「主体」となれることが大切
 - ※ 双方のバランスを大切にしながら児童生徒の自律・自立を目指す
- 親子の触れ合い(の機会の創出) ⇒ 中学校の活動につなげる＝地域貢献(子育て・・・親子で学校が楽しい)
- 町内の「人」を巻き込み「学習支援」「子どもの活動の場」を拡大させたい
- 町内の「人」を巻き込み「地域のよさをつくり直す(よさの再構築)」
 - ・・・「緑の少年団」「書き初め」

【次年度の活動計画に関わって】

- 廃品回収に関わって
 - ・ マンパワーが足りない/学校単独では厳しい
 - ・ 小中合同(町内会＋児童を巻き込んで＝つながる)
 - ・ 企業の力を借りる ※ 町内会の高齢化
 - ・ 世の中への発信(財源が必要か)
 - ⇒ 生徒(部活)の活動費
- ※ PTA(在校児童とその家庭)＝卒業後はつながりが切れがち
 - ⇒ 学校運営協議会(地域学校協働本部)を通してネットワークを広げる
 - ＝卒業しても児童生徒とその保護者に力を借りる
- 不登校に関わって
 - ・ 学校内外での活動の選択肢が増えることはよいこと
 - ・ 地域の身近な人を通して社会(外部)との関わりをもつ

【例】

- ☆ スポーツを通して
- ☆ トランペット＝吹奏楽
- ※ 格好いい大人(ゲストティーチャー)を見せる ⇒ 児童生徒の関心の広がり

2 令和7年度の実施の方向性

- (1) 「学力の定着」については、「読書」や「家庭での学習・活動」の大切さをおさえながら、引き続き学校と地域社会が協働してできることを考えていく
- (2) 「メディアとの接し方」については各校の「教育活動」や「PTA 活動」の一環として取組を進めている現状もあることから、まずはそれらの取組の充実を図っていく

- (3) 「学校に足が向かない児童生徒」や「教室に入ることに困難さをもっている児童生徒」にとって、学校内外で興味関心をもって取り組めることを探り、外部人材等が「児童生徒との活動の時間」を設けることができるかどうかを追求することはできるのではないか
例：お祭りが好きなのであれば、企画・準備段階から大人と一緒に参画してもらう
- (4) 「親子での活動」については、「学級・学校PTA」や「町内会（育成部等）」で企画されていることから、学校運営協議会では「学力の定着」や「不登校問題」に関わって企画・実施することができるかを探っていく
- (5) 廃品回収については、必要としている学校とそうではない学校があることから、まずは事務局内で各校の現状を把握する

3 令和7年度に地区内で取り組むこととするテーマ案

- (1) 児童生徒の学力の確実な定着
※ 読書活動や家庭学習も通して
- (2) 学校や教室に足が向かない児童生徒の学校内外での活動の場づくり

4 考えられる取組内容

【学力の確実な定着に関わって】

- (1) 地域社会から授業(学習)支援サポーターを募ること
- 南地区内の一般住民
 - 長期休業中の大学生
 - 2月以降の自宅学習に入った高校3年生
- (2) 学校教育活動の中で 読書の楽しさを伝える読み聞かせ等の活動
- (3) 中学生・高校生・大学生による夏季休業中の学習(宿題)支援
- (4) 児童生徒の家庭での学習や活動を促進させる「児童生徒向け講座」等の開催
例: 絵画/体操/縄跳び/調理 等

【学校や教室に足が向かない児童に関わって】

- (1) 各学校における「児童生徒が興味関心をもっていること」の聞き取り(調査)
- (2) 「児童生徒の興味関心」に関わって一緒に活動してもらえる地域人材さがし
- (3) 地域人材(外部講師)による
- ① (可能であれば)校内での児童生徒とのやり取り
 - ② 校外の社会教育施設等での児童生徒とのやり取り

【その他】

- (1) つばさ学級(稚内市教育支援センター)に通っている児童生徒への出前講座(体験活動)的なものも考えられるのではないか
- (2) 「学校に行かないことは『悪いこと』ではないこと」や、「将来、児童生徒が自立するための学びの場を地域社会の中でつくっていくことも一つの方法であること」を地域社会に理解してもらうための広報活動を進める必要がある